隠岐島前高校郷土部収録

海士町の民話から㉗

■再話・解説
酒井董美（山陰民俗学会会長、元隠岐島前高校郷土部顧問）

古屋の漏り

語り手…川西 茂彦さん（保々見、明治27年生まれ）

昔々大昔、その昔ねえ、爺さんと婆さんが牛を飼っちょったわけなんだ。ところが、その爺さんと婆さんが非常に欲だからねえ、あらゆる人が、爺さん、婆さんを目つけちょったわけなんだ。

あるときに、大きな雨の降った晩に博労が爺さん婆さんの牛、盗みに来たわけだ。ところが、もう大雨だからひどく家が漏ってきたときに、狼のやつが牛をめがけて来たわけだ。

雨が漏ることを「漏りどん、漏りどん」言いますけんね。

ところが、爺さんと婆さんと、「獅子、狼より漏りどんが恐ろしいなあ」。こうやったわけだ。

ところが、狼が「われが一番世の中で恐ろしいもんだと思っとんのに、おれより恐ろしい漏りどんちゅうもんがおるだかい」言うてねえ、こいにぶつかったら大変だと思うて、とんで逃げたわけだ。ところが、博労が、その狼がとんで出てきたから、牛が出てきたかと思うてねえ、

「こりゃ、うまいことしただ」言ってかあに、狼の背中へ乗ったわけだ。ところが、狼がねえ、

―こりゃあ、漏りどんつうやつがおれに抱きついたつうだけ ん……―

ほいかあ、一所懸命で、とんでまわって逃げてしまったわけだ。ところが、途中でその博労が気がついたところにゃ、狼なんだ。

―いや、こりゃ大変だ―　と思うてねえ、今度、とびおりてしまった。

―こら、早いこと身を隠さんと大変だ―　思ってうろたえておるうちに、大きな穴があったわけだけん、そこへ博労は隠れちょったわけだ。そいで、狼は帰って、猿に出会ってねえ、

「なんと猿さん、猿さん、世の中におれより恐ろしいものはないと思うとるに、あの婆さんが〝獅子・狼より漏りどんが恐ろしい〟言いやがった」「漏りどんてやあ、どんなもんだ」て。

「いや、それがなあ、こうこうして婆さんとこへ牛盗りに行ったとこめがねえ、その漏りどんというやつがおれの背中へ乗ってなあ、一所懸命やったとこめが、あんま、よけいにおれがとんだ（走った）もんだから、け、漏りどんがおれの背中から落ちてなあ、ここの穴へ入っちょる」ちゅうわなあ。

「そうかい。そんならひとつ、漏りどんを見つけてやろう」ちゅうだないか。

そいから、猿と狼がねえ、その穴へ行きて一所懸命で捜すわけだ。なんぼう捜しても手当たりがない。ところが、猿のやつが尻尾で一所懸命でこう捜したわけだけん、中の博労がねえ、なんだ、フニャフニャした柔いもんが来たなあと思って、そいつをつかまえてやったわけだ。つかまえてやったところが、猿の尻尾だった。

「ええい、こん畜生」と言うで、猿は一所懸命…それを博労が引っぱったわけなんだ。猿は、

―えらいことをした。漏りどんに尻尾を取られた―　ちゅうだけん、一所懸命でがんばって出てこうとするわけだ。狼が、また、猿の手伝いをして助けてやろうとするわけだ。そうこうするときに尻尾が切れてしまったわけだ。

そいで、そういうことで猿の尻尾は短あて一所懸命踏んばったから、猿の尻は赤くなったちゅう、そういうとんと昔があったげな。

■収　録：　昭和48年6月17日収録
■聞き手：　酒井董美

【解説】関　敬吾『日本昔話大成』では動物昔話の中の「古屋の漏」として、この話が収められている。猿の尻尾が短くなった由来譚として語られているが、これも一般的なものである。

イラスト／福本隆男（崎出身、三郷市在住）